

ファイズの手紙と書簡集『わが窓の十字架』  
サリーベーン・メレー・ダリチュー・メン

片岡弘次

ファイズは1951年3月9日、ラーワルピンディー陰謀事件の容疑者として逮捕された。以後出獄するまで、妻アリス・ファイズにあてて書いた手紙をまとめたものが書簡集『わが窓の十字架』である。この中には135通の妻への手紙がある。サリーベーン・メレー・ダリチュー・メン初めての手紙は1951年6月7日付であった。それは初めの3ヶ月間は、紙もペンも与えられず、外部との接触は一切許されなかったからであった。

ファイズは投獄中幾つかの監獄に移されている。逮捕時にはラーヤルプルの監獄にいたが、1951年6月より1953年5月までハイデラーバードの監獄に入れられていた。そこから92通をアリスあてに書いている。その後、病氣治療で行ったカラチーのジナー病院とカラチーの監獄から6月から8月の間に35通、そして残りの35通を同じ年の1953年10月から出獄する1955年4月までに、モントゴメリーの監獄で書いた。このようにこの書簡集には、4年に渡るファイズの人生の様子や考え方が述べられている。

ミルザー・ザファル・ハサンはファイズの伝記を書く計画を立てていた。しかしファイズの60歳の誕生日にファイズとアリスに会った際、アリスの言葉から、伝記より先にこれらの手紙をまとめることになった<sup>1)</sup>。この作業にアリスの果たした役割は大きい。手紙の翻訳に関しその時、アリスはファイズの方を指差し、ザファル・ハサンに「この人に決して同情してはいけない」と言っている<sup>2)</sup>。アリスはファイズの慌てない性格をよく知っており、また、最初の手紙を得てからその6月は20年めにあたっていたからであった。

これらの手紙の原文は英語であった。そこでザファル・ハサンがウルドゥー語に翻訳し、それをもう一度ファイズが見直すという方法が取られた。出版の話が決まったファイズの誕生日から6月までには4ヶ月しかなく、あまりにも期間が短かすぎ、ファイズは数を100通に限定することを提案した。しかしザファル・ハサンはその一通をも落すことはよくないと答えた。そこで不必要な部分、手紙の冒頭に出て来るアリスへの呼び掛けやファイズが手紙を書くのを忘れたり、アリスの誕生日を忘れたなどということの許しを乞う言葉などは省略することにした<sup>3)</sup>。

これらの手紙はアリスによって20年間保存されて来た。当時ファイズから来た手紙には日付がなく、受け取った手紙ごとに日付を付けておいたのは、アリスの功績であった。しかし日付がないことは検閲者の目をはぐらかせる利点があった<sup>4)</sup>。これらの手紙によってファイズの投獄時のことだけでなく、その前後のことも分かる。また当時はファイズの創作力の旺盛な時でもあり、この書簡集も詩集『そよ風の手』や『獄中<sup>ダステ・サバー</sup>記』と同じように作品の一つとして見なすことが出来る。

ファイズのこの書簡集の特徴は、40年から42年の間サッジャード・ザヒールが獄中から妻ラズィヤ・サッジャード・ザヒールにあてて書いた手紙の書簡集と同じである。それらの手紙をラズィヤが『獄中の絵』<sup>ナクシハ・ズインダーン</sup>の題名で出版した。その一冊を彼女は獄中のファイズにも送った。それについてファイズはアリスへの手紙で次のように述べている。「サッジャード・ザヒールの奥さんが、彼が40年から42年の間獄中にあった時書いた手紙を出版した。それらを読むと笑いが出て来る。彼もたえず私のように、奥さんの誕生日などを忘れてしまい奥さんに謝まっている。私は私のような人が外にもいたことを知り、大いに力づけられた」<sup>5)</sup>。

アリスがファイズの手紙を取って置こう、そして将来出版しようとの考えを懷いたのはその時より始まった。その考えをファイズに明かすと、ファイズは「そのような話を決めるのに、ここにパトラス・ブハーリーがいてくれたらいいのに。いずれにせよ、もし出版されることになったら、ウルドゥー語でしたい」と答えた<sup>6)</sup>。

監獄の中から出すファイズの手紙は、検閲を受けねばならなかった。幾つかの手紙は検閲で削除されている<sup>7)</sup>。それ故それらの手紙の中には、ファイズの考えが充分に表現されていない部分もある。そしてまたファイズ自身、それらの手紙は当初より、プライベートでなくパブリックであるとも述べている<sup>8)</sup>。にもかかわらず、ファイズが獄中で考えたこと、あるいは家族やアリスに対する愛情の表現もある。更に獄中でガーリブやハーフィズ、さらにモーパッサン、チャーホフ、ユーチェ、サルトル、エリオット、イブセン、カフカなどを読み、フランス語やスペイン語、アラビア語、ペルシャ語を勉強していたことも分かる<sup>9)</sup>。そしてこのような世界文学を研究するだけでなく、ファイズはそれらをウルドゥー文学の中へ取り入れようとしている。

獄中のファイズにさまざまな人が会いに来た。ファイズは心の底から感謝の意をもって会ったことをアリスに報告している。

ファイズは自分の不在中、アリスが果す一家の主としての責任、アリスの孤独、試練を強く感じている。この書簡集の手紙は、ファイズのそのような感情で満たされている。彼はアリスを絶えず慰め力づけている。アリスは困難に耐え、独力の稼ぎにより、子供を連れて幾度も監獄に会いに行った。ファイズはそのような時をお祭り<sup>イード</sup>と考えてしまう<sup>10)</sup>。そして監獄に妻や子供の写真を置いて見ている。ファイズは言う、私には3人の恋人がいると、アリスと2人の子供の。子供の喜びを聞くとファイズは喜び、もしそうでないと心配してしまう<sup>11)</sup>。

これらの手紙によりファイズの友人関係、親戚関係も分かる。それらの中にはラスィード・ジャハーン、スーフィー・タバッスム、バトラス・ブハーリー、タースィル、アフマド・ナディーム・カースミーがいる。他にイギリス人で、1953年ファイズの英訳詩集を出したヴィクタ・キアルナンもいた。更に多くの他の友達の話がこれらの手紙の中に出て来る。ファイズの娘ミーズは父親の性格の基本的なものを次のように述べている。「彼の体と命の中には、私の考えでは、血の代りに愛の、愛することの川が波うって流れている。彼は言っている、多くの人を愛せば愛す程、愛された人達はそれ以上におまえを愛すものだ。それで私も努力しています、愛の川の中に身を沈められるように」<sup>12)</sup>。

ファイズはこれらの手紙の中で、進歩主義文学運動と一緒に推進させて来たラスィード・ジャハーンの死に、悲しみの表現を次のようにしている。「彼女のモスクワでの死のニュースを昨日得た。もし私が監獄の外にいたら、激しく泣いたであろう。しかし今は泣く涙もなくなってしまった」<sup>13)</sup>。更にこの手紙の中で、ラスィード・ジャハーンの人間性や彼女の友情、ウルドゥー文学への貢献も明らかにしている。

また監獄の中で短編作家マントーの死についても聞き、その悲しみを表現している。「マントーの死を聞き、悲しみに耐えない。多くの欠点にもかかわらず、私は彼が好きだった。マントーは偉大ではなかったが、正直で誠実であった」<sup>14)</sup>

ファイズは監獄の中で幾つかドラマの翻訳もした。そして多くのナズム、ガザルを書いた。この獄中でのナズムやガザルをまとめたのが詩集『そよ風の手』、『獄中記』である。そして『そよ風の手』は1952年の終り、投獄中に出した。その詩集の出版の考えは投獄された年の9月から持った。『獄中記』の中の詩にはその殆どの詩作日が銘記されている。しかし『そよ風の手』の中の詩にはそれが銘記されてない。しかしアリスへ送った手紙によりそれらの詩の詩作日がおおよそ推測がつく。それは詩が出来るたびに逐次その報告もしているからである。ファ

イズのこれらの手紙によりその創作活動の動き、背景も推測できる。

ファイズは監獄で「暗い道で殺された我等」や「監獄の夕べ」などの優れた詩を書いた。ファイズの手紙から当時彼は、エセルとローゼンバーグの手紙を研究していたのが分かる<sup>15)</sup>。彼らの上に、アメリカの軍事秘密をソ連に売り渡した容疑が掛けられ、二人は死刑になった。この詩には、偉大な目的のために人間生活が犠牲にされたことに対して、深い同情が示されている。ファイズはアリスへの手紙で次のように述べている。「高い理想のために殉教者は死ぬ。だが彼らの目的や努力は決して死なない」<sup>16)</sup>。

ファイズの詩には美しさがある。「監獄の夕べ」は為政者に対する抵抗の気持を述べたものである。しかし抵抗の気持を表現する場合でも詩の美しさを忘れない。この詩が出来る時もファイズは詩における美の重要性について、アリスへの手紙で述べている<sup>17)</sup>。

ある時ファイズは、アブドル・ハキーム博士に監獄でイスラームの歴史を書くように言われ、ファイズは喜んで準備を始めた<sup>18)</sup>。だがしばらくして、自分はそれにふさわしくないと考え、取り止めにした<sup>19)</sup>。しかしこの時の準備により、ファイズの作品に広い意味での宗教性が現われるようになった。ファイズは進歩主義文学者であり、共産主義的思想に共鳴していたが、イスラーム教から出て来た神秘主義に関心を抱き、ファイズの進歩主義、共産主義は人類愛的になった。

ファイズはアフマド・ナディーム・カースミーがイクバルを批判したのに対し<sup>20)</sup>、イクバルを評価していた。それは詩集『ナクシュ・フアルヤーディー叫びの刻印』の中の詩「イクバル」からも分かる。ファイズは獄中でイクバルからも技法について学んだ。ファイズは言った、「生き残ってあるもの、それは我々に方法を示してくれる。そこには優れた比喻や象徴がある。イクバルはそれら昔の詩人が残してくれたものを使った」<sup>21)</sup>と。これら古典詩人の中にファイズはイクバルを入れ、イクバルのように古い比喻や象徴を時代に即して使い、その中に新しい意味を加えた。

判決が出るまで多くの人は、そしてファイズ自身も死刑の判決を予測した。しかし1953年1月、判決が出ると死刑ではなかった。判決前の詩には死刑を予測する詩も少なくない。それと同じく手紙にも緊張感があった。だが判決後は残りの刑期を数える文面もある<sup>22)</sup>。更に長い監獄生活からの倦怠感を伝える次のようなものも少なくない。「我々の監獄は、何か外の国の一隅のように見える。ここにはこの世の出来事は何も起っていないようで、人間生活の危険や試練はないよう

に見える。ここでは生活の実感がない。生も死もなく、笑ったり泣いたり愛したり喧嘩したりする人間は、小説の中の人物のようにしか見えない。このようなことを感じられるために、我々は想像力を働かせるように努めねばならない」<sup>23)</sup>。他の手紙の中では次のように述べている。「自然が人間に、人間もまた数ヶ月間、どこか地下で無意識の状態で過し、そして再び新しい空気を吸いに外に出てこれる能力を与えてくれなかったのは残念である。ちょうど多くの時間、無感覚で半分は眠ったような状態で過ごし、そして考えたり感じたりして汗が出て来るような、そういう能力が与えられなかったのは残念である」<sup>24)</sup>。獄中生活が3年半たった時、この半睡眠の状態を次のように述べている。「この頃、半睡眠のような状態である。日はあたかも頭の上を通り過ぎて行くだけのように見える。そして今は何曜日なのか、何日も思い出せない」<sup>25)</sup>。更にある手紙で気の滅入る監獄の夕暮れを次のように伝えている。「今、夕方の5時である。日は傾いた。もう数秒間のうちに、壁や木立の上の赤味を帯びた灰色の明りは消えて行くだろう。鳥の声も聞えなくなるだろう。そして時間は止まるだろう。しかし沈み行く日の悲しみだけは今も真実である、今まで残っていたところの。夜が、その死の確信と翌朝に生まれる希望をもって来てくれないだろうか」<sup>26)</sup>

これらの手紙の中には、監獄で見た雨期や季節の移り変わりの様子も繰り返して出て来る。更に子供時代の思い出や自分の履歴まで語っている。例えば、「1911年、スィヤールコート誕生、アラビア語の初等教育をマシッドで受ける。その後ガバメンタル・カレッジ・ラーホールで学ぶ。二冊の詩集を出す。即ち1940年『叫びの刻印』、1952年『そよ風の手』。さまざまな評論を書く。既婚。ヘビー・スモーカー」<sup>27)</sup>。

またある手紙ではアリスが送って来た質問表にも答えている。これらはすべて長い獄中生活を生氣あるものにするための工夫であったのであろう。現実の生活から切り離され、その期間が長ければ長い程、孤独にさいなまれ精神は沈滞する。ファイズの獄中生活の後半にはこの憂うつを感じさせる部分がある。

しかしファイズの大きな特徴はこのような状態においても決して将来に対する希望を失っていないことである。それはファイズの楽天主義によるもので、詩にも手紙にも見える。投獄の当初でも次のように述べている。「ここに着いてから恐怖や危険な感じはなかった。この感じは以前にもなかった。なぜなら私は道徳的に罪となることを何もしていなかったからである。法的に罪を負わねばならないことを何もしていなかったからである」<sup>28)</sup>。あるいはまた次のようにも述べ

ている。「もともと自分の心の中で罪を犯したことがないなら、人はその個人に振り掛けて来る逆境や別離に耐えることが出来る。それに対し罪の意識や自分を欺いた感じがあると、対処の仕様が無い」<sup>29)</sup>。

このファイズの楽天主義は明るい将来が必ずやってくるという確信に基づいている。それ故、ファイズの考え方にはイクバルと同じく懐疑的な所がない。『獄中記』の中の詩「<sup>ムラールカート</sup>出会い」の中の一節で次のように言う。この夜が与えた悲しみ／この悲しみは夜明けの確信／悲しみより慈深き確信／夜より偉大である夜明け。この詩にはファイズの苦痛が表わされているが、それと共に安心の表現でもある。このことはファイズのこの書簡集についても言える。

- 
- 1) (ed) Mirzā Zafar-ul-Ḥasan, “Salibeñ Merē Darīchē Meñ”, Pāk Publisherz Ltd., 1971年6月, p. ze
  - 2) 同掲書 p. ḥe
  - 3) 同掲書 p. kāf
  - 4) 同掲書 p. ze
  - 5) 同掲書 手紙29, 日付1952年3月25日, pp. 51~52.
  - 6) 同掲書 手紙79, 日付1953年4月11日, p. 128.
  - 7) 同掲書 例えば手紙3 (日付1951年6月24日) では検閲について述べている。手紙6 (日付1951年8月2日) の一部を削除。手紙32 (日付1952年4月22日) では名前を明かさない。手紙57 (日付1952年9月6日) の一部は削除。手紙118 (日付1954年9月24日) では名前を明さない。
  - 8) 同掲書 手紙2, 日付1951年6月14日, p. 3
  - 9) 同掲書 手紙5, 日付1951年7月23日, p. 7。(アラビア語) 手紙7, 日付8月17日, p. 9。手紙13, 日付10月15日, p. 19。(チェーホフ) 手紙14, 日付10月30日, p. 21 (モーパッサン) 手紙17, 日付11月28日, p. 26。(チェーホフ) 手紙26, 日付2月2日, p. 38。手紙26, 日付2月22日, p. 43。(アラビア語) 手紙29, 日付3月25日, pp. 51~52。手紙41, 日付6月21日, p. 72 (ニーチェ) 手紙50, 日付9月15日, p. 84。手紙59, 日付11月10日, p. 98。手紙71, 日付1953年1月16日, p. 113。手紙75, 日付2月4日, p. 118。手紙81, 日付3月24日, p. 81。(フランス語, ベルシャ語) 手紙85, 日付4月19日, p. 138。(イブセン) 手紙89, 日付5月23日, p. 143。(ホースター) 手紙90, 日付5月29日, p. 145。(フランス語, スペイン語) 手紙95, 日付7月7日, p. 152。(サルトル) 手紙101, 日付10月12日, p. 143。(ニコルソン) 手紙103, 日付1954年2月21日, p. 164。(哲学) 手紙106, 日付5月22日, p. 167。手紙112, 日付7月21日, p. 173。(エリオット) 手紙113, 日付7月27日, p. 174。(オスカー・ワイルド, チョーサー, ホーマー) 手紙116, 日付8月25日, p. 180。(イブセン) 手紙119, 日付11月19日, p. 184。(料理) 手紙124, 日付11月29日, p. 190。(カフカ) 手紙127, 日付1955年1月7日, p. 194。手紙135, 日付4月9日, p. 202。(デザイン)

- 10) 同掲書 手紙22, 日付1952年11月22日, p.37。
  - 11) 同掲書 手紙2, 日付1951年6月7日, p.2。手紙9, 日付1951年8月10日, p.12。  
手紙50, 日付1952年9月15日, p.83。手紙106, 日付1954年5月22日, p.168。
  - 12) Dr. Ayyūb Mirzā, “Ham Ke Ṭḥahare Ajnabi” Shīrīn Gul, Rāwalpindī 1979, p. 195.
  - 13) (ed) Mirzā Zafar-ul-Ḥasan. “Salībēn Merē Darīchē Meñ” Pak Publishers Ltd., Lāhōre, 1971年6月, 手紙47, 日付1952年8月9日, p.80。
  - 14) 同掲書 手紙128, 日付1955年1月27日, p.196。
  - 15) 同掲書 手紙106, 日付1954年5月22日, p.167。
  - 16) “ “ “
  - 17) 同掲書 手紙39, 日付1952年月6月6日, pp. 69~70。手紙52, 日付1952年10月2日, p.87。
  - 18) 同掲書 手紙84, 日付1953年4月26日, p.136。
  - 19) 同掲書 手紙91, 日付1953年6月8日, p.145。
  - 20) (ed) Khalīg Anjam “Faiz Aḥmad Faiz” Anjuman Taraqqī Urdu Hind, Dehlī, 1985, p. 286.
  - 21) Dr. Ayyūb Mirzā, “Ham Ke Ṭḥaharē Ajnabi” Shīrīn Gul, Rāwalpindī, 1979年, p.138。
  - 22) 同掲書 手紙73, 日付1953年1月19日, p.115。手紙76, 日付1953年2月8日, p.119。手紙103, 日付1954年2月21日, p.164, など。
  - 23) 同掲書 手紙80, 日付1953年4月18日, p.128。
  - 24) 同掲書 手紙83, 日付1953年4月21日, p.134。
  - 25) 同掲書 手紙120, 日付1954年10月15日, p.185。
  - 26) 同掲書 手紙122, 日付1954年11月11日, p.187。
  - 27) 同掲書 手紙114, 日付1954年8月25日, p.177。
  - 28) 同掲書 手紙1, 日付1951年6月7日, p.2。
  - 29) 同掲書 手紙9, 日付1955年8月28日, pp.12~13。
- 〈キーワード〉 文学, ファイズ論, ファイズ

(大東文化大学教授)